

## 秀次公豹変

秀次公は変わってしまった。尾張にいた頃はこんなこととはなかったのに、殿下より天下の跡目を譲り受けてからというものは行いが乱れがわしく、もはや愚かたしか言いようのないありさまとなった。側近の諫言も容れず、放埒な振る舞いばかりを重ね、あげく皆人々は公を疎んじるようになってしまったのである。

よく引きあいに出される鷹狩りの一件についても、話しておく必要がある。公は、鷹狩りだの夜興引きだの言っでは、本来は必要のない武器の類を取り揃えさせていたのだ。世の中が鎮まっているとはいえ、どんな時にも戦さの心構えを忘れないと言うと、なるほど勇ましくも見える。しかし、公の狩りはそんな綺麗ごとには収まらない物々しさだった。供奉する者たちまでが余計な具足や甲などを挟箱に隠しての随行で、いつでも取り出せるように準備していたのである。

表向きは秘密裡の準備だったのだが、こんなことが秘密裡で終わるはずがない。公然の秘密というもので、関白様が不穏な準備をしているといった噂はすぐに言い広められた。そうなると、都の近郊で行われる小さな御遊も、さながら敵が近くに潜んでいる出城にいるかのような雰囲気となった。

世に囁かれ始めた関白様御乱心の風評は、殿下の耳にも届いていた。もちろん、当の秀次公がそんな大逸れた考えを持っていたはずがない。しかし、疑いを招いても仕方のないことばかりをしていては、誰もが似た話を言上するようになり、最初は聞き流していた殿下の気持ちも揺らぎ始めた。一大虚を吠えれば万犬実を伝える。俚諺にそう言う状況が公の周囲で起こっていたのである。

事の真偽を糺さずにいきなり罪を問うことなど、殿下の本意ではなかった。それで、まずは使者を送って公の考えを尋ねたのだった。聚楽第へ派遣されたのは、宮部継潤、前田玄以、増田長盛、石田三成、富田一白の五人である。

「関白様に野心があらりのよう、太閤殿下があらあら

お聞き及びの様子。そのような話はもちろん出鱈目かと存じ上げますが、もっともらしく方々から報告が上がつて来ますので、奉行衆も困っております」

「何と申す。思いもよらぬ話ではないか。余がこの城に起居しているのも殿下の御芳恩より他にはありえぬ。どうしてそんな企てを思い付こうか」

「私めもそう信じております。ただ口さがない連中もおりますので。どうでしょう、ここは殿下に對しまして忠誠を誓う起請文を出されてはいかがでしょうか。七枚継ぎの誓紙にしていただければ、殿下もさぞやお喜びになるかと存じ上げます」

「なるほど、そこもとらの言うことも分からぬではない。しかし、起請文となると、書くこと自体が恐れ多いことでもあるぞ」

「殿下を軽んじる気持ちがないのであれば、この際致し方ないことと存じます」

「そうか……」

石田三成らの申し出を受けて、秀次公はすぐさま聚樂第へ吉田神社の禰宜、兼治かねはるを呼び寄せた。そして奉行衆の目の前で神々勸請を儀をはじめ、いろいろなと仰々しい儀式を執行させた。その様子は、見ている者にとっても寒気を覚えるほどぞろ恐ろしいものだったが、その上で、公は殿下に對してはわずかばかりも野心の存ぜぬ旨を告げるのであった。

使者たちは誓紙を受け取って伏見城へ戻り、殿下の前に示した。

「やはりそんなことだろうと思っておったわ」

殿下のこの一言で、騒動は穩便に収まるはずだった。不穩な動きを恐れていた国中の人々も、皆喜びあったのである。

ところがある。淀城の普請を仕切っていた木村重茲きむらしげこれが、いったいどんな事情があったのか、女房用の輿に乗って、七月四日の夜、聚樂第にやってきたのである。そして人目を避けるかのように女房詰所から奥へ上がり、秀次公に面会して、その夜のうちに淀へ帰っていったのだ。

この木村重茲は、木村定重さだしげの長子である。木村定重は殿下が取り立てた重臣だったので、重茲は豊臣の家政で力を振るってもおかしくない身だった。ところがその立場を石田三成に奪われ、取るに足りない地位に甘んじていたのである。それでもいっか秀次公に伝手をつけるこ

とで出世し、権勢も大きくなっていたらしい。そのため増田長盛や石田三成から目を付けられていたのである。増田と石田らは、木村の家中に間者を送り込み、その動静を毎日報告させていた。木村はそんなことになっているとは露知らず、聚楽第へたびたび顔を出していたのである。そんな成り行きを石田たちが報告を上げたものだから、殿下の猜疑心は再び大きくなっていった。また七月五日になって毛利輝元もろりてんもとより、一つの報告がもたらされた。

「先の春のことですが、秀次公より当家へ家臣の白江成定が派遣され、誓紙を取り揃えて和を結びたいとの話がありました。関白様からのお申し出なので、私輝元も誓紙を書き上げたことがございます」

この話は石田三成を通して、その時にやりとりされた誓紙の写しとともに、殿下に報告された。このような、秀次公にとっては都合の悪い話や品物が、方々から寄せられるので、謀反の心は少しもなかったのに、公はおのずと歴代の反逆人そっくりの立場に置かれていった。

## 聚楽と伏見

殿下は国内の動揺が大きくなることを怖れていた。それでこのたびの騒動を鎮めるべく、手を打った。

「いいかげんな噂が囁かれるのも、直々の対面がないからだろう。すぐに伏見に来るがよい。いろいろと言われていることについて直接に話を聞き、春風が凍てついた氷を溶かすように、お互いの疑念を晴らそうではないか」

そう言って改めて迎えの使者を派遣したのである。今回の使いは、宮部継潤、前田玄以、中村一氏なかむら かずうじ、堀尾吉晴ほりお よしはる、山内一豊やまの うちかずとよの五人である。

さて、この一行が京に向かって出立した後のこと、殿下には何か思うところがあったのだろう、堀尾吉晴を呼び戻した。そして戻ってきた堀尾に向かって言った。

「もしも彼奴めが空気を察して、顔を出さなかったら、どうすればよいかのう」

「ご安心ください。きっといいように取り計らい申し上げましょう」

堀尾は、そう軽々しく答えのだが、殿下はしばらく考

えてから、一言告げた。

「貴様の命を、このたびと併せて三度くれてやることになるな」

その言葉を聞いて、堀尾はことの重大さを痛感してじっと涙するよりなかった。

先行していた四人に追いついた堀尾は、都に所用が出来たので先に行かせてもらおうと言い、さらに馬を早めた。そうして三条で饅頭屋を営む道徹という男にもとにやってきた。

「今回の関白様の件、どうも簡単に収まりそうにない。殿下の命を承けてこれから聚楽第へ参るのだが、もし関白様が伏見へお越しにならないとのことになると、この堀尾、その場で差し違えてでも打ち果たすつもりでいる。お前には、今までのいろいろな面倒なことを申し付けてきて申し訳なく思っておる。その礼として小袖など用意せねばならぬのだが、この期に及んでは何の準備もできていない。そこでこの書状をわが子忠氏ただうじに届けてくれなにか。金銀も貰えるようにしたためである」

堀尾は、そのように言い残して、道徹のもとを去っていった。そして再び一行に合流して、聚楽第へと向かったのである。

秀次公の前に控えて、五人の使いが登城の主旨を厳かに申し伝えたところ、ここは謹んで伏見へ参上すべしとか、いやとんでもない、そんなことをしてはいけないとか、重臣や近習たちは侃々諤々の論議となつて紛糾を極めた。公の御前で畏まっていた堀尾が、一通りの発言が終わったところで公の様子を窺うと、公は何か覚悟を固めたかのようにも見て取れた。

その時、息せき切つて一人の男が飛び込んできた。摂津の国で堤防の工事を差配していた吉田好寛である。吉田は、公の前までづかずかと進み出て、一気にまくしたてた。

「伏見よりの御使いが参っていると伺い、慌てて馳せ参じました。野心の件、殿が本当にお考えであるならば、もとより伏見へ行くことはあり得ません。逆にわずかもそうしたことをお考えでないのなら、やはりここ聚楽第に居られて、何度でも物事の筋を申し上げるのがよろしいのではないのでしょうか。それでもし太閤殿下よりのご容赦がいただけないのであれば、私めに一万の兵をお

預けください。先陣をきって戦さを交え、忠勤を尽くしましょうぞ」

当人はいかにも頼りになりそうな口振りで言うのだが、座は一瞬にして凍りつく。堀尾もしばらく公の反応を窺うよりなかった。秀次公が静かに口を開いた。

「もうよい、伏見へ参ろう」

秀次公は戦さは望んでいなかったのだろう、使者たちの求めに応じることとなった。

「それでは、このままお供いたしましょう」

堀尾はそう言って、他の四人とともに、秀次公の一行に扈従することとなった。そうして三条道徹のところへは、このたびは一命を取り留めた旨の報せを送った。

伏見へ到着した秀次公は城へは向かわず、まずは木下吉隆の屋敷に入った。そこで殿下からの命令を待っていたのだが、届けられたのは、予想通りの内容だった。

「対面には及ばず、高野山へ急ぎ登るべし」

すでに覚悟を決めていた公は、すぐに髪を下ろして出家の身となり、供の侍百人も静かに剃髪を執り行った。今朝までは天下の主と仰がれていた方が、見るに堪えない姿となり、七月八日の夕暮れ刻に伏見を出立した。その夜の宿りは、井手の里、玉水となった。

伏見から玉水までは、お忍びとはいえ、馬上の侍が二百が付き従っていた。石田三成は、そこへ見張り役として徒侍を四五人ばかり付けていたのだが、報告を受けて、

「玉水から先は、御供には馬上を二十騎、徒侍は十人でよろしいでしょう。そのように木下も指図しているはずです」

と言ひ、殿下にもその旨が言上された。

九日からは近習ばかりわずかの者が付き従っただけの寂しいものとなった。雀部重政、山岡景以、不破万作、玄隆西堂らの面々である。夜は興福寺の一坊に宿を求めた。公は、方々から見舞いの飛脚がやってきて騒々しくなることを厭ひ、高野山に対しては見舞いの儀は一切停止すべしとの命令を下した。通達は駒井重勝と益田少将を通して廻状が出され、高野山の登り口にも入山を禁じる見張りが立った。

明けての翌十日、高野山青巖寺に到着して秀次公はついに籠居となった。寺に入ってから、この世での命運は言うに及ばず、来世のことも望めない、哀れな身の上

となったのである。中秋前夜の夕刻、虫の声も、かつて聚楽第で聞いていた優雅な趣とは変わり果て、仮寝の宿に眺める月は冷え冷えとしていた。

## 益田少将走る

秀次公の若君と妻妾たち三十人あまりは徳永寿昌とくながとしまさの屋敷へ移送された。七月八日の夜のことである。一行には前田玄以と田中吉政たなかよしまさが監視に付き添い、十一日にはそこから玄以の所領である丹波の国、龜山へ送られている。その間は、他からの接触は一切禁じるなどの命令が出されておき、親しい者からの便りも望めなかった。彼女たちは後には京に戻され、洛中を引きまわされた上で六条ろくじょうの河原での処刑に及ぶのだが、益田少将はこれら係累の方々をめぐる事情を詳しく知っているらしいので、話を聞いておこう。

「お気の毒と言え、これ以上のことはありませんまい。こんな話を聞いたのなら、とても生きておられるものではないかもしれません。私はもとは近江国浅井郡で小庵を営んでいた坊主でしたが、秀次公が天下の跡目を譲り受けられてから、私めを三奉行の一人に加えて下さったのです。感謝しても尽くせないのは、この恩をおいて他にはありません。だからこそ、今回のことがあってからは、お見舞いと称して龜山へ参り、皆様方のお命を頂戴して引導を勤めさせていただこうと決心したのでした。私には一人娘がおりましたが、浅井の縁で淀殿をお頼りするよう言い含め、大坂へ遣りました。また妻のことは、藤井太郎右衛門という者に任せました。龜山での首尾次第では首を刎ねるよう命じておいたのです。それで、二十二日の明け方、龜山へ急いだのでしたが、生憎なことに老ノ坂には厳重な警備が敷かれておりました。見舞いの者は身分によらず、すべて追い返されていたのです。聞けば、奉行衆の命令だということでした。それでせめて龜山で様子を教えてもらおうと、警備の者に少々の心付けを渡して、私は空しく帰ってきたのです。その後、その者から聞くことができたですが、若君たちは龜山城の本丸に閉じこめられていて、そこへはその者も立ち入ることができなかつたとのことでした」

そういう次第なので、結局、益田少将も接触を諦めざ

るを得なかったという。

## 国の魂

私見を陳べる。そもそも関白職は、ことわざにも、国の魂と言われている。ことのほか、高貴な職務なのである。それであるにも関わらず、太閤殿下は、しかるべき後継の人選を行わなかった。殿下が天下の実権とともにこの職を秀次に譲ったのは、私情である。私情というのは道理ではない。道理が欠けていると天命にも背く。いずれの場合でも天罰が下されてしかるべきである。

私情に発する欲望、すなわち私欲は、これより大きいものはない。私欲のふくらみは、行く末の繁栄を表しはしない。義に背いて子孫の繁栄を心に強く願ったところで、天はけつして許さないのだ。古今の先例を鑑みても、私欲から繁栄を願った者は、その甲斐もなく子孫の途絶に至ることが多いではないか。

もしも職責を果たしうる人選を行うのであれば、今回は信長公の嫡孫、織田秀信殿へ譲るのがもっとも適当ではなかったか。まったくそうなっていたら、かの聖代、周公旦の世が今の世に再現したと評しうるのに、どうしてわざわざ甥を捜し求めたりしたのだろう。これぞ私欲の極みではないか。

ある賢者は、私と少し異なる考えを持っている。その方はこう言っている。太閤殿下の私欲にも、そこに至る事情があった。殿下以前には、関白職は一条院以来、五摂家で順廻しにされ、職責を重んじた人選は行われてこなかった。この聖職は人の思惑によって汚されてきたのだ。その報いが重なって、ついには秀次のような者の手に廻ってきて、さんざんに汚れ果てたのだ。何とも恐ろしいことよ。

よくよく考えてみると、殿下の心一つから生まれた私欲は、それまで五摂家によって積み重ねられたものに比べると小さく、秀次が関白職を汚したように見えても、実はその大元は秀次以前にある。その発端は実に恥ずかしい。

周公が太公に「何に基づいて斉を治めればいいのだろうか」と尋ねた。太公曰く「賢者を尊び、功ある者を重んじるのがよろしい」と。周公曰く「後の世、必

ず主君を殺す家臣が現れるだろう」と。太公が周公に「何に依って魯を治めるのがいいのだろうか」と尋ねた。周公曰く「賢者を尊び、親族を大切にすればいいだろう」と。太公曰く「後の世、次第に国家は弱くなるだろう」と。

我が国で起こったのは、まったくその通りのことなのだ。天下国家がよく治まるも、あるいは乱れるも、すべて原因がある。じっくり考えるのがよい。関白職に相応しい人選を行わないのは、鳥に翼がなく、盲人に杖がなく、人に魂がないのに等しい。これによって国家の政治はその要諦を失ったことになる。

## 尽未来不絶の寺法

讒言者らによる秀次公追及は、公が高野山に籠もってからも続いた。考えてみるに、昔から讒言者は知恵が働くものである。増田長盛と石田三成は、公が生きていると自分たちの立場が悪くなると考えて、ますます誣告を重ねたのだ。二人の奉行がもっともらしく言うものだから、殿下も次第にその方向に流されてしまい、

「可哀想だが、腹を切つてもらおうしかあるまい」と言つて、福島正則、福原長堯、池田秀氏を看取り役として高野山へ派遣した。

高野山の秀次公にも、福島ら三人がやってくるとの知らせが届いていた。

「どうやら最期の時が来たようだな。この者たちは余に恨みを抱く者どもだ。石田らめ、うまく仕組んだものよ」

そして玄隆西堂の方を見て、笑つて言つた。

「お前は急いで山を下りてくれ。そして母上のことを宜しく頼む。息子はこのように惨めな末路をたどることとなったが、せめて母上には来世にも幸せになってもらいたいのだ」

玄隆西堂は落ち着き払つて答える。

「私儀西堂は最期まで殿にお供する所存でここへ参りました。その旨を栗野秀用を通して申し上げました時より、下界のことは万事抜かりなく執り行つております。ご母堂が御ため、東福寺小庵の件もきちんと段取りを済



ませてここへ同道させていた দিয়েおりますので、ご安心ください。つきましては、下山の儀は何とぞご容赦賜りますようお願いいたします」

秀次公は、その行き届いた配慮に対して謝意を述べ、殉死を許したのだった。

福島正則らの三使は青巖寺に到着すると、住持の木食<sup>もくじき</sup>応<sup>おう</sup>其<sup>き</sup>を呼びづけた。「前関白殿御切腹の件は太閤殿下の御意であるとの書簡が奉行人より届いている」と言っ  
て、その書状を開いて見せた。そこにはこう書かれていた。

太閤殿下の御意として申し付ける。秀次公御謀反の件、少しも疑いなきにより、ご切腹致すがよろしいとのことである。

その地、山住みの罪人は、弘法大師がお慈悲を下され、助命されるとの教義があるとしても、尊父秀吉公に対しての逆臣の振る舞いは、極悪非道の罪過、到底許せるものではない。かかるときは、大師様はどのようなにして救われるというのか。いかなる罪障人をも助けると如来弥陀に誓っておられるのだろうか。学侶の人々、行人方、一山へその旨をお伝えいただき、早々に処置に及ばれるがよろしい。なお三人の使いから詳しい説明があるはずだから、ここでは省略しておく。畏みて謹言申し上げる。

文禄四年七月十三日

徳善院玄以

長東大蔵大輔

石田治部少輔

増田右衛門尉

浅野弾正少弼

木食興山上人

木食上人は途方に暮れていた。寺法は遵守せねばならない。しかし、だからといって殿下の意向に背くわけにもいかない。十五日の明け方、執事と呼ばつけて、福島正則らが持参した書状を示して、こう告げたのである。

「関白様の件はどうにもなるまい。議論はあろうが、あれこれ言っても始まらない。関白様をお守りするのは今日一日の問題である。それに拘って、未来永劫に渡って守らねばならない寺法と引き替えにすることはできな

いのだ。関白様には犠牲になってもらうしかあるまい。ともかく、全山の評議が必要だろう」

木食上人に指示に従って衆議判が開かれた。席上では「寺法を根拠に公のご切腹をお救い申し上げよう」といきり立って言う者もいれば、「書状の趣旨も道理が通っている」と言う衆徒もいて、評議はいたずらに紛糾するばかりだった。一方では、三使らから全山総意の結論を早く出すよう急かされていることもあって、木食上人は衆徒の前に進み出て語り始めた。

「皆様方、そろそろまとめさせてもらってよろしいか。寺法に基づいてという声もなるほどその通りだろうが、その寺法も当山が繁栄していてのこと。この度、もしも殿下の意向に背いて、何らかのお咎めを蒙るような事態ともなると、当山の破滅にもなりかねない。関白殿の御切腹を救い申すべく手を尽くすことは、かえって寺法をも破り、大師様開山の秘法をことごとく滅ぼしてしまうことになるのではないだろうか。とにかく、ここは急いで御切腹していただくということにしようではないか」

あらかじめ決めてあった結論ではあったが、上人の口から冷徹に告げられると、衆徒はみな、疎ましげに睨みつけるばかりで黙るしかない。慈悲の心を捨てたのか、目先の利益を取ったのだろうか、妻と子を殺した男らしい結論だ、肩からは煌びやかな袈裟を掛けて心は塵埃とはこのことだなど、言葉にはできない思いが衆徒面々の胸中を去来して評議の場は気拔けたような空気に支配された。

だが一同がどんな思いを抱いても、豊臣家との深い繋がりがから権勢を誇る上人に非難の矛先を向けることはできない。ここ数年は秀次公との関係が厚かったことを思い、気心の知れた者同士で「まったく人とも思えぬ奴腹よ」と囁き合うのが関の山だった。

金堂での衆議判が長引いていた頃、高野山としての返事が無いことを理由に、福島ら三使は三千の兵で青巖寺を取り囲んだ。

「彼奴ら、何のつもりだ。」

激怒したのは秀次公である。

「そこまで無礼な振る舞いをするのなら、こちらにも考えがある。雀部よ、連中を静かにさせてこい」

そう命ぜられた雀部重政は木食上人に使者を送った。

「御使いの振る舞いは失礼ではないか。公は静かに御

腹を召されるおつもりなのに、侍のあるべき姿を知らない不届き者だ。高野山としてはどのように対処する所存か。そもそも高野山においても、昨日までは君臣の礼儀を言ってお守っておきながら、今日になって寺法を用いないと言う。こうなっては、是の非の言ってはおられないこととなるぞ」

強硬な態度を知らされた木食上人は慌てて三使の元に出向いて告げた。

「関白殿においても御切腹は覚悟いたしております。なのに兵士たちに命じて包囲なさるのは、このうえもない無礼な行爲です。弓鉄砲を向けるような真似はなさらぬよう申し上げます」

木食上人の口調も声を荒げたものとなっており、その強い抗議に三使は包囲を解き、軍勢を引きあげたのである。

## 秀次公切腹

高野山に籠もってからの成り行きは、秀次公もおおよそは予測の範囲だった。そのため一日二日前から遺言をしたためるなどのことを始めており、十五日のこの日は、それらの用事もあらかた片づいていた。福島正則らによって一度は乱された気持ちも落ち着かせ、公は行水を求めた。雰囲気を整えられて、準備をしていたのだろう、すぐに用意は整えられた。

浄めの儀を終えたところで、殉死を申し出ている者たちが希望を述べた。

「お供にあたっては後に従うのが慣習ですが、同じことであればお先に行かせていただきたく存じ上げます」  
「いっそのこと、殿に介錯をしていただけないでしょうか」

「私めは雀部に」

それらが玄隆西堂から伝えられると、秀次公は「もっともなこと。それでは我が手にかかり、闇魔帳に華やかに書かれるがよろう」と言った。そして秀次公および近習たちの切腹が始まった。

一番手は山本主殿助やまもととのものすけ十八歳。公より国吉の脇差が与えられた。拝領するやそのまま左の脇へ突き立てて右へ回す。そしてすぐさまに首が落とされた。

二番手は山田三十郎やまださんじゅうろう 生国播磨の国、三木の住人、十八歳 厚藤四郎の脇差が下され、それで腹を十文字にかっ捌いて首を出したところで、公がそれを打ち落とした。

三番手、不破万作生国尾張の国、十八歳 この若者には鎬藤四郎が与えられた。不破は、

「父母より頂いた体に自ら傷つけるは不孝とはいえ、忠義のためなればお許しください」

とつぶやき、みごとにやりおさせた。これも介錯は秀次公が行った。

四番手には玄隆西堂。西堂は雀部重政に介錯を頼んでいたのだが、公が自らその役を務めようと言い、これも無事にし終えた。

これら四名に続いて、秀次公が腹を切った。正宗の脇差を置き、心穏やかな様子で儀に臨む。えいと一声、そして「打て」。愛刀の浪游兼光が振り下ろされた。享年二八歳。

雀部重政も後に続いた。かねてより賜っていた国次で自害し、介錯は服部吉兵衛によって行われた。

この雀部重政は摂津の国は尼崎の住人で、篤き信義と猛き武勇をもって知られていた。このたびの件でも細やかな心配りがなされていたので、秀次公ともども世間からの誹謗を免れたのである。秀次公に仕え始めた頃は公からの思し召しも一際のものであったが、のちにはそれほどでもなくなっていた。それでも公が伏見を出てから高野山に到っての最期を迎えるこの日まで、恨みの言葉を口にすることはなかった。信義はかくあるべしと、人々は口々に語り合ったのである。

福島正則、福原長堯、池田秀氏らは、十六日の晩、伏見城に戻った。切腹の様子を殿下に報告した後、

「秀次公の御首はいかがいたしましうか」

と尋ねると、殿下からその返事はなく、

「木食もあつけなく切腹させたものよ」

と、少し涙ぐんだ様子だった。

十五日の秀次公に続いて、侍臣たちも陸續と命を絶った。まず木村重茲が摂津の国、五ヶ庄大門寺で切腹した。木村は日頃召し使ってきた者たちに刀や脇差などを与えたのだが、家来の一人、大崎長行が殉ずる心づもりであるのを察して言った。

「大崎よ、もしおかしな真似をしようものなら、墓場

の下に行っても貴様のことを恨んでやるから、そのつもりでおれ。それとも、この場で供はしないとの起請文を書くか、どうだ」

そうして大門寺の住職に牛王宝印を用意させて、誓紙を取ったのだった。それから住職には金子五枚の謝礼を与え、庭に畳を敷かせて屏風で取り囲み、屠腹に及んだ。他に死に様を見せなかったのは、腹を切る際の不手際を怖れ、名声を惜しんだのに違いない。

白江成定は、京都四条の貞安寺で切腹した。その妻は、四条道場で自害したのだが、一首したためている。

心をも染し衣のつまなれば

同じ蓮の上にならばん

（あの方は思いを法の道に託しました。いつも身につける僧衣の褌のように、私はあの方の妻でもあるので、来世には同じ蓮の上に並んで生まれましょう）

熊谷直之は嵯峨二尊院での自害となった。七月十六日の夜明けに、二尊院を訪れて和尚と対面した。

「このような巡り合わせから、腹を切ることとなった。恐れ多いことだが、御寺を汚させていただきたい。事を致すにあたって何か御用があれば仰せつけてくださいませ」

「かたじけない。来世のことを宜しく頼んでおこうと思う。年来、親しくしてきたわけでもないのに、御寺を汚すのは恐縮の限り。わずかこればかり何にもならぬが、黄金三十両並びに刀脇差を納めるので事後の事を型どおりに取りはからっていただきたい」

そう言って、品々を差し出すのだが、和尚は袈裟の袖に涙を落とすばかりだった。秀次公が高野山へ入って以来、自らの命運も悟っていたのだろう、ここ二三日でさまざまの所用を片づけており、今は気が紛らわされることもなく、穏やかな切腹となった。辞世の歌が残されている。

あはれとも問ふひとならでとふべきか

嵯峨野ふみわけておくの古寺

（私のことを痛ましいと思ってくれる人でなければここを訪れる者もないだろう。ここは嵯峨野を踏みわけてやってきた奥の古寺なのだ）

栗野秀用は栗田神社前の鳥居小路での切腹である。「秀次公には御謀反の心は微塵のなかった」と、そう大声で叫んでから腹を十文字に掻き切って事果てた。おあこ

の御方の父である日比野下野守と、お辰の御方の父山口少雲は北野天満宮の近くで切腹した。丸毛不心斎は相国寺の門前で「許しを得ておりませぬゆえ、切腹はできません。どうせなら首を刎ねてもらいたい」と言って討たれた。その後、一柳可遊ひとつやなぎ かゆうを始めとして、国々の大名に預けおかれていた人々にもことごとく切腹が言い渡されたのである。

この謀反の件は、本当のところは最後まで分ならず終いとなった。自害した者は誰一人として白状しなかったし、他の誰かを名指しで責めたわけでもない。濡れ衣を着て死出の旅に出るのも因縁による宿命がったないものだったのだと観念して終わってしまったのである。涙ぐましいことである。

## 殺生関白

私見を陳べる。秀次公が讒言にあったのは、とにかく関白という聖職を蔑ろにして、すべてにおいてその法制を違えたからだろう。早かろうが遅かろうが同じであり、天罰が下るのは自明のことである。そうなると、増田長盛や石田三成の讒言にも少しばかりは意味があったのかも知れない。

秀次公の悪行の一つに、正親町上皇崩御の際に行った鹿狩りの件がある。院がお隠れになってまだ七日と経たぬうちの鹿狩りなどは以ての外で、関白にあるまじき行為である。本来は諒闇といって深く喪に服するところなのだ。昔は天下の臣民すべてが精進を心掛け、故院を偲ぶ気持ちがたいそう深かった。関白職ともなると、他の位階とは異なっていて、ことさら深い物忌みについたと聞く。なのに秀次公は殺生禁断の比叡山に押し入って鹿狩りをしてしまった。しかも誰憚ることなく大っぴらに行ったものだから、鉄砲の音も四方に響き渡っていたのである。当時、洛中の辻々に落書が毎夜掲げられた。

院の御所手向けのためのかりなれば

これをせつしやう関白といふ

（院の御所の手向けとして行う狩りなので、それを行うお方を摂政関白ならぬ殺生関白という）

上皇崩御と同じ年の六月八日、秀次公は比叡山へ女房たちを引き連れ登っていた。一昼夜を通しての遊興はふだんよりも、その悪行が並はずれていた。昼は一日中狩りを続け、夜は一晚中夜興を引き、鹿だの猿だの、餌食となった生き物の数は膨大であった。

「この山は桓武天皇の御草創以来、殺生禁断、女人結界の山ですぞ。分別のある行動をしていただきたい」山の衆徒たちが木村重茲を通して苦言を呈したところ、公より返ってきたのは思いも寄らぬ言葉だった。

「余の領地である山において、余が遊興に耽っているだけではないか。そののどが悪いのだ。それとも何か、天下人を他の誰かと交代するがよいということなのか」

また南光坊に宿した際、料理の味付けがひどく不味そうだったことがあった。すると、公は、貧僧たちが細々と蓄えてきた味噌の中へ、こともあろうか、魚や鳥の肉を入れて汚してしまったのである。その他、放埒な行爲は、常識を逸しており、まさに愚の骨頂だった。

こういうこともあった。同様に比叡山での御遊の折、激しい雨が続いて下山予定の日を過ぎても山での滞留となったことがあった。その時、料理を担当している横田という者が院主に向かって言った。

「米を五石貸してください」

「この山は昔から、そうした備蓄は多くは致しません。坂本より運ばせましたところ、量が揃わないとのことです」

用意してあった食糧も底をつき、その晩は供人たちも空腹のあまり兵糧掛かりの横田を口々に罵倒し始めた。すると横田は自らの責を逃れるためなのだろう、この院主が不行き届きだとのことをわめき散らしたのである。それは秀次公の耳にも届き、公は「この山も自ずから亡びる時が来たようだ」と言って比叡山に対する憎しみは深めたのだった。

同じ月の十五日、秀次公は北野へ向かった。盲人が一人、杖をついて通っているのを見つけ、秀次公は「酒でも如何かな」と声を掛けた。そして盲人の手を取った瞬間、右の腕を切り落としたのである。

「誰か、人はいないか、ならず者めが人殺しをしている、出てきてくれえ、助けてくれえ、お侍さんよお」盲人は大声で騒ぎたてたのだが、熊谷直之から「そ

んな姿になってまだ助かりたいと思うのか」と尋ねられて、さては殺生関白の辻斬りに出くわしてしまったのだと察した。

「前世に犯したどんな悪行の報いでこのような盲いになったものか、目が見えなくなることもだけでも悲しいのに、腕まで切られて長生きなどするものか。さっさとこの首を刎ねて殺生関白の名を後代にまで伝えればよからう。貴様は敵の首を取るなど考えもしないのだ。関白という職にあって、天下の邪法を正すどころか、自らが邪法を行うのは、桀紂の再来であるぞ。因果はすぐに巡ってくるに決まっとるわい」

悪罵を連ねた盲人だったが、秀次公の太刀によってその場で切り刻まれてしまったのである。

私見を陳べる。不昧因果（因果の巡りは明らか）など言うところではない。物事の道理なのである。これらの悪行と秀次公の滅亡には、符合することがある。秀次公は六月八日に比叡山に登って狼藉を欲しいままに行っているのだが、七月八日には高野山で憂き目に遭っている。六月十五日に北野で盲人を切ったことも、その刀で介錯を受けているのだ。昔は「因果を思っに行いを正しなさい、因果は孫に及ぶか子に向かうか、それとも我が身に返ってくるものか」などと言ったものである。今ではそんな悠長なものではなく、「因果は皿の端や針の先を巡る」と言う。これは世俗の諺だが、なるほどその通りだろう。

## 妻たちの運命

若君や愛妾ら係累の処刑は、前田玄以、増田長盛、石田三成が執行役となって行われたのだが、どのような迷惑があったのか、兵士三千に武具を着けさせ物々しい準備が整えられていた。

八月二日、三条河原には二十間四方の穴が掘られ、鹿垣が周囲を取り囲んでいた。橋の下の方には三間の塚が築かれ、そこに秀次公の首が西向きに据えられた。寵愛二十余人の女たちに拝ませるがよいとお達しが出されていたのである。またその早旦の聚楽第では、荒くれだった河原者どもが南惣門の西側に立錐の余地なく並び



立っていた。具足や甲を着け、太刀長刀を抜き身で構えている者、弓に矢をつがえてている者など、ぞっとする眺めである。

これに先立つ一日前、京内の徳永屋敷は重苦しい空気に包まれていた。秀次公寵愛の方々は、公の高野山入りとともに丹波の国亀山に送られていたが、七月末日に徳永寿昌の屋敷へ移っていたのである。儂い命は今日で終わるか、それとも明日までか、そんな最期の時を迎えていたので、禁じられていた近親からの手紙もたくさん届けられた。鶏の声もたて続けに聞こえるようになり、八月一日の空も霧がかった中でも明るくなってきた。知己の人々からも別れの手紙も届けられる。文を預かってきた使いの女房は、便りを渡した後も、それを入れていた文箱の片づけもせず、蓋を片手に持ったまま、目も赤らめて別れを惜しんでいる。そんな別れの場面は、傍らにいる者もどうしてよいのかわからなくなってしまう。

一日はさまざまな悲哀の中で時間が過ぎてゆき、ほどなく日も暮れた。行水の事、経帷子の事、遺物の事などより他に行くこともなく、平家が没落した時以来の悲しみだろう。

ある賢人が言っていた。係累の方々に及んだ哀しみの数々は、秀次のちっぽけな心のうちに端を発している。後々、国家を治める人は、この事態を深く胸に刻み、天助天罰の訪れは確実であることを肝に銘じておかねばならない。

二日の朝、日も高くなってくると追い立ての役人たちが「ぐずぐずするな」と口々に言っていて急がせる。痛ましい光景である。何を言っても逃れられない命運に近づいていることを、各々は知っているのだ。二十余人の方々がよろよると歩き出すと、心得のない河原者が、腕を掴んで引き立てては牛車一台に二三人ずつ押し込んでいく。御方々に対する不作法も涙ぐましいのだが、若君や姫君に対する荒っぽい仕打ちに到っては、苦悶の声を挙げない者はいない。処刑される自身のことは言うまでもなく、幼い息子や娘に向けられた仕打ちを見ては御方々の目には涙が溢れてくる。縁のない見物も、貴賤の隔てなく泣きだし、しばらくは収拾のつかない状況となってしまう。

秀次公の寵愛を得ていた頃は華やかに着飾っていたの

に、今日はうって変わって、白い帷子より他にまとうものはない。若君や姫君を乳母にも預けず、それぞれの母親が自らの膝の上で抱いている。子どもたちは罪のない声で「御乳もここへ呼んでよ」と言っているさまの愛らしさ、それだけに伝わる痛々しさは、これに以上のものはあるまい。

一行が三条河原に到着すると、御方々は牛車から引き出された。皆人々は目の前に晒されている秀次公の首の前へはらはらと近寄った。

「ああ御屋形様、おいたわしや、今すぐにお供いたしまししょう」

声にならない声を挙げながら、伏し拝む様子は痛切の極みである。

## 辞世の歌

この日に誅された方々には辞世が残されている。まず一の台の御方。この方は菊亭右大臣藤原晴季卿の娘で、他の御方々よりは上の立場にあった。享年三十四歳。増田長盛や石田三成らの讒によって、あり得えない謀反の咎に問われたのは悲しくて仕方ない。どうにもならない悔しさは辞世の歌に込められた。

心にもあらぬうらみはぬれぎぬの

つまゆゑかゝる身となりにけり

（御屋形様が太閤殿下をお恨みいたすなど、心にもないことです。けれどもそんな濡れ衣でも、衣が濡らされた時には棲にも水が掛かってしまうのと同じように、御屋形様の妻である私もまたこのように刑場に消える身となってしまうました）

続いて他の御方の歌、

お宮の御方 十三歳

一の台御息女

うきはたゞおや子のわかれと聞きしかど

同じみちにし行くぞうれしき

（辛いことは親子の別れと聞いておりましたが、このたびは母上と同じ道を行くことができるのが嬉しうございます。）

お長の御方 十八歳

美濃の国竹中貞右衛門尉息女

時知らぬ花のあらしにさそはれて

のこらぬ身とぞなりにけるかな

（季節を知らない風によって多くの花々が散ってゆきます。私もまた他の皆様方とともに、何も残さない身の上となってしまう。）

お辰の御方 十九歳

尾張の国山口少雲息女 姫君あり

かぎりあれや何を恨みんから衣

うつゝに來たりてうつゝにぞ去る

（もとより限りあるのが人の世でしょう。こういう憂き目にあったからといって何を恨みましょうか。私など夢のうちに栄華を極め、夢のうちに消えていくだけなのですから。）

おさこの御方 十九歳

北野松梅院息女 若君あり

残しをくかぞいろの上を思ふにも

さきだつ身よりわきてかなしき

（残していく父と母の身の上を思うと、先立つ我が身よりもいつそう悲しく思われます。）

中納言の御方 三十四歳

摂津の国小浜殿息女

時分かぬ無常の風のさそひ來て

花もみぢも散りにけるかな

（人の世は定めのない無常とありますが、無常の風というのは季節を決めずに吹いてきます。このたびはその風に誘われて美しき桜も紅葉もともに散ってしまいます。）

おつまの御方 十七歳

四条殿御息女

故もなき罪にあふみのかぐみ山

くもれる御代のしるしなりけり

（理由もない罪に問われている私ですが、近江の鏡山に雲がかかっているのも、鏡が曇ったさかしまな御代の証です。）

おいまの御方 十九歳

奥州最上息女

うつゝとも夢とも知らぬ世の中に

すまでぞかへる白川の水

（私が生きてきたのは御屋形様のありがたいお心ざしに満たされたところであるとともに、言われのない罪に貶められる濁った場所でした。夢か現実かも分からないそんな世の中に暮らすことなく、私も清き白川の水を求めて返ってゆきます。）

按察使殿 三十一歳

秋庭殿息女

濁る世の白川の水にさそはれて

その水屑となるぞかなしき

（白川の水は清く美しいと聞きます。濁り多き世の中では白川の水に惹かれはするものの、美しい水に浸ると引き替えに水底の藻屑となってしまうのも悲しいものです。）

おあこの御方 二十二歳

美濃の国日比野下野守息女

濡れ衣をきし妻ゆゑにしらいとの

あやしや先とあとにたちぬる

（濡れ衣を着せられた御屋形様の妻であるがため、私めには何も知らされておりません。知る知らぬの縁でいうと、白糸すなわち生糸が織りなす不思議のようなものなのでしょうが、先に逝かれた御屋形様をすぐ後より追うこととなりました。）

おさなの御方 十六歳

美濃の国武藤長門守息女

消えてゆく身はなかなか夢なれや

残れる親のさぞかなしき

（消えてゆく私自身は、かえって夢のようにぼんやりとした気持ちとなっておりませんが、この世に残る親はさぞや悲しい思いに満たされていることでしょう。）

お国の御方 二十二歳

尾張の国大嶋新左衛門尉息女

君ゆゑになみだがはらの白川や

思ひの淵にしづむかなしき

（御屋形様を思うゆゑに涙が溢れてまいります。涙川ならぬ、この加茂の河原で御屋形様の潔白を訴えても報われず、追慕の思いに沈むのが悲しい限りです。）

およめの御方 二十六歳

尾張の国堀田次郎左衛門尉息女

千代までもかはらじとこそ思ひしに

うつりにけりな夢を見しに

（いつまでも変わらないと思っていたのに、すべては変わってしまいました、私が夢を見ていた間に。）

お菊の御方 十六歳

摂津の国伊丹兵庫頭息女

先だつもをくるゝもみな夢なれや

空より出て空におさまる

（先立つのも遅れるのもすべて夢なのでしょう、因縁の織りなす仮の姿より生まれて元の場所に収まるのです。）

お牧の御方 十六歳

齋藤吉兵衛尉息女

妻ゆゑにきえぬる身にしかなしきは

のこれる母のさこそと思へば

（御屋形様の妻であるがために、この身が消えてしまうのはやむを得ないと思います。しかし、悲しいのは母が悲しみを抱えたまま後に残されることです。）

おあひの御方 二十四歳

古川主膳息女 京衆なり

思はずも墨染め衣身に添ひて

かけてぞたのむ同じ蓮に

（予想もしなかったことに墨染め衣を身にまとうこととなり、心から願うのは御屋形様と同じ蓮に生まれ変わることです。）

お竹 捨子

夢にしも知らぬうき世に生まれ来て

また知らぬ世に帰るべらなり

（夢に知ることもなかった憂き世に生まれ来て、またも知らぬ世に帰って行くのでしょうか。）

おなあめの御方 十九歳

美濃の国坪内三右衛門尉息女

いかにとも何うらみけん難波がた

よしあしもたゞ夢の世の中

（どうしようかと言つてもいったい何を恨みましょう、「何うらむ」の何の縁で言う難波潟のヨシやアシではないけれど、物事の良し悪しはとにかく夢の中のことなのです。）

お藤の御方 二十一歳

大草三河守息女なり。

父母にまみえまほしく侍れども、ゆるしな  
ければ

（父母にお会いしたかったのですが、お許しもない  
ただけないので）

いかにせん親にしあはぬうらみこそ

うき世の外のさはりなりけれ

どうしようか、親に会えない恨みこそが現世の外にも繋がる  
障碍です。）

おきいの御方

生国近江の国

咲けば散る花の秋風立ちにけり

たまりもあへぬ萩がえの露

（咲けば散るのが花の命運です。そんな花にむかって激しい秋風がたつと、ひとたまりもなく消えてしまうのは萩の枝にかかる一滴の露です。）

お虎の御方 二十四歳

上賀茂岡本美濃守息女

限りある身をしる雨の濡れ衣よ

そらも恨みじ人もとがめじ

（雨が降って衣が濡れるのが当たり前なら、人の命に限りがあるのもまた当たり前でしょう。それを知っているのです、たとえそれが濡れ衣だといっても、雨を降らした空を恨みはしないのと同様に、わたくしは他人様に恨みを向けることはいたしません。）

お小督の御方 二十一歳

和泉の国淡輪息女

生まれきてまたかへるこそみちなれや

雲のゆききやいともかしこし

（人の世に生まれ落ちて再び戻ってゆくのが御仏の教えであるのなら、生じては消える雲のありようはなんともありがたいものでしょう。）

おこほの御方 十九歳

近江の国鯉江才助息女

是は儒道のあらましを聞き得しとなり

（この人は儒教の概要を聞き知っているらしい）

我はただみだの誓ひも頼まじな

出づる月日の入るにまかせて

（私は阿弥陀の誓いも当てにするつもりはありません。月や太陽が昇ったあとにまた沈んでゆくように、このたびのことは自然のごく当たり前のことなのです。）

少将

生国越前

あめつちのそのあひだよりうまれきて

同じみちにし帰るべらなり

（人はみな、天地の間に生まれて、また同じところにもどってゆくのでしょうか。）

おこちやの御方 二十一歳 最上衆なり

濡れ衣をきつつなれにしつまゆゑに

身は白川の淡と消えぬる

（御屋形様に濡れ衣が着せられたのであれば、衣に馴染む棲

のごとく、妻として御屋形様のお近くにおいでいただきお  
りましたゆえに、この私も清い白川に浮かぶ儚い沫のごとく  
消えてゆきます。）

左衛門の督 三十八歳

河内の国岡本彦三郎母なりけり

これよりは万御用人也

（これからは諸事にわたる使用人たちである。）

なかなか花のかずにはあらねども

つねなき風にさそはれにけり

（私めは御屋形様のお側にはべる麗しい方々と並ぶものでは  
ありませぬが、普通ではない激しい風にあつて花々が散るよ  
うに、一緒に散らされてしまいます。）

右衛門の督 三十五歳

播磨の国村善右衛門尉妹なり

とてもゆくみだの御国へいそげただ

御法の船のさをなぐるまに

（これから向かうことになる阿弥陀の国へどうあつても急い  
でもらいたいものです。救済の船の棹が投げられるとともに、  
浄土に到るわけにはいかないのでしょうか。）

お今 四十三歳

近江の国高橋息女

生国と名をよみかなへし事神妙なり

（生国と名前を歌に詠みこんだのはみごと  
だ。）

何事のとがにあふみの今なれや

むしもあはれをなきそへにけり

（いったいこのわたくしはどういう咎めにあつたのでしょうか。  
近江の今という名前ではありますが、罪にあつた身の今  
この時となつては、虫の声も悲哀を添えているように聞こえ  
ます。）

東殿 六十一歳

美濃の国丸毛不心斎女房

夢の間に六十あまりの秋にあひて

なにかうき世に思ひのこさむ

（あつという間に六十回を余す秋を会って参りました。この  
年になっていったいどのような未練を、こんなつらい世の中  
に残すのでしょうか。）

これらの歌は、かねてより覚悟を決めて皆々方が詠ん  
でおいただろう、それを一卷にまとめて出されたもの

である。

## 虐殺

刑場では他の御方々たちより先にと考えて介錯人の前へ急ぐ者もいれば、人より後にと臆した者もいて、人さまざまである。衆目にさらされたそんな動きもまた、哀れを誘ってならない。

これからどうなるのかと見ていると、五十くらいの髭面男が進み出た。風貌以上に性根も荒々しく見えるその男が、子犬をつかみ上げるような仕草で可愛らしい若君を捕えてたかと思えるや、二度ばかり刀を立てた。いきなり執行が始まったのだ。

若君の母親やその他一同の者は悲鳴を上げた。見ている人々の間のここかしこからは嗚咽が漏れる。三歳になった姫君は、母上であるお辰の御方へ抱きついた。

「わたしもなの」

「大丈夫ですよ、南無阿弥陀仏と唱えなさい。そうすればお父上にすぐにでもお会いできるのですよ」

お辰の方がそう言って念仏を勧めると、姫君は子どものたどたどしい口調で南無阿弥陀仏を唱え始めた。しかし十度くらい繰り返されたあたりだろうか、粗暴な河原者が割って入ってきた。

「そんなに願ったって叶わぬことよ」

そう言っ、母上の膝より姫君を奪い取り、その胸元を、こちらもやはり二度突き立てて、傍らへ投げ捨ててしまったのである。姫君のからだはまだヒクヒクと動いている。心を取り乱してしかるべきなのに、お辰の御方は気丈にも「非道なことをしないで、まず私を殺しなさい」と言っ、西に向かったのだが、言葉も終わらぬうちに首は身体の前転がされた。見物者たちも正気を失って何が起こっているのかもわからなくなってしまったかのようだった。早々と八九人も手に掛け、それぞれの屍を若君の亡骸の上に積み重ねていくので、取り乱した女房が走り寄った。

「関白家のご子息さまの上に、こんなことがあったからといって、他の方の屍を重ねるとは何事か。奉行はなんのためにいるのだ。このくらいのことと止めさせられないのか」



さんざんに罵倒すると、それからは介錯人たちの様子はためらい勝ちに見えた。

哀れなものである。悲しいものである。見物人の間から聞こえてくるのは「こんなに痛ましいものだとか分かっていたのなら、見物などには来なかったのに」という悔恨の声だった。二十人あまりを切り続け、鴨川の水も色を変えていた。それとは対照的に三人の奉行は、顔色も変えず、ことさらに心を痛めているようにも見えない。鷹揚に構えているその姿は、やはり彼奴らが讒言者なのだとの誹りを招くものとなった。

その夜、洛中の辻々に、誰の仕業か、落書が立った。世の中は天下人一人のものではない。この世に生きるすべての人々のものだ。関白家の犯した罪は代々の関白家に対して行われた先例に則って処置されるのが正當なのに、下々の者が犯した罪でその妻子までが誅されるような、今日の暴虐は、まったくもって恣意的な取り決めである。将来にわたって栄えある政道ではない。因果の巡りがやってくることに御用心あそばされよ

と書かれ、その端に、一首の狂歌が添えてあった。

世の中は不昧因果の小車や

よしあしともめぐりはてぬる

（この世の中は明々白々に因果の鎖が繋がっている。そのめぐりは小さな車輪のようなもので、いいことも悪いこともすぐに返ってくる。）

私見を陳べる。秀次公は、人を殺傷することを好み、自らの手で試し切りも行っていた。盲人や乞食に酒を飲ませ、その後で「罪づくりに生きながらえるより、余の手に掛かってはどうだ」と言って、逃げようとするところを引き倒しては、脳天から切りおろすこともあったという。その因果はたちまちに返ってきたようだ。若君たちの筆舌に尽くせない悲惨な死に様は、哀れとも可哀想とも、言葉も失ってしまうほどのものだった。かの紂が忠義があつて善良な者を火あぶりにし、妊婦の腹を割いた悪徳をも彷彿とさせる。

秀次公の謀反に關与したとして、遠流に処された人々には、曲直瀬玄朔、里村紹巴、荒木元清、木下吉隆等である。たとえ秀次公に謀反を考えることがあったとしても、このような人々を連座に問うのはあり得ないことで

ある。

各人は、秀次公の反逆は知りも及ばなかったというこ  
とを言上しようとした。しかし、増田長盛や石田三成の  
威に萎縮して取り次ぐ人も現れず、結局は奉行人の指図  
に任せて、それぞれの配所に向かったのである。

また地方の国に預けられたのは、以下の人々である。

|        |           |
|--------|-----------|
| 一、一柳可遊 | 江戸の徳川家康へ  |
| 一、同妻子  | 加賀の伊藤秀盛へ  |
| 一、服部一忠 | 越後の上杉景勝へ  |
| 一、同妻子  | 吉田清右衛門尉へ  |
| 一、渡瀬繁詮 | 常陸の佐竹義宣へ  |
| 一、明石元知 | 安芸の小早川隆景へ |
| 一、前野長康 | 駿河の中村一氏へ  |
| 同妻子    | 同人へ       |
| 長子景定   | 同人へ       |

曲直瀬玄朔、里村紹巴、荒木元清は、後に赦免となった。  
この他はみな切腹が仰せつけられた。